

本書のタイトルは、(出来ることならば)「大和と琉球の狭間で」もしくは「屋久島はどこにある?」としたかった。

内に向かっての細見ではなく、外からの俯瞰である。屋久島の、地球の中での位置づけ。なぜ屋久島の植物相が魅力的なのか。その答えは、それぞれの種の、他者(他地域産の集団や姉妹種)との関係性を探ることにより導き出される。

本書はまた、「北琉球としての屋久島」という視点に重きを置いた。屋久島が、(狭義の)「日本列島」の南端\*であることは周知の事実である。通常はそのような視点でのみ捉えられがちだが、しかしまた(異なる次元においての)「南西諸島」「琉球弧」の北端\*であることも確かなのである。\*仔細に見れば、それぞれ悪石島、宇治群島が南端、北端。

「中琉球」、ことに南に対峙する奄美大島との距離は 200 km 余。例えば東京と静岡・浜松間、大阪と岡山・広島間の直線距離と等しい。むしろそれらの地域間の生物相はほとんど変わらないが、屋久と奄美の生物相は著しく異なる。その差は、日本本土はもとより、朝鮮半島、南琉球、台湾、中国大陸などとよりも大きいといえる(と同時に、時間を遡って探れば、屋久と奄美には意外な共通点が見出されるのだが、それについては後述)。

路傍で出会う植物に関しては両島できほど差はない。著しく異なるのは、いわゆる固有種である。両島は、固有種(下位分類群を含む)の数でも、日本で有数。多くの固有種は、(小笠原を別とすれば)南西諸島に集中している。屋久島(種子島を含む)、奄美大島(徳之島を含む)、沖縄本島(主に北部)、八重山(石垣島・西表島)が 4 大センターといってよい。

奄美・沖縄(併せて中琉球)と、屋久(北琉球)、八重山(南琉球)では、同じ「固有種」といっても、次元が異なる。島が成立してからの時間が、中琉球は北琉球や南琉球よりも圧倒的に古く、長い時間を経て大きく本質的な変異をもたらしている。

北琉球・南琉球にも、数多くの固有分類群が存在する。島嶼に隔離された生物は、何らかの変化をもたらし、固有性を示すのは当然といえる。殊に高く険しい山岳地帯からなる屋久島の場合、顕著な特化を示すものが少なくない。しかし中琉球(奄美大島や沖縄本島)の場合と異なり、相対的な時間的隔離は通常明らかに短く、変異は小さく 2 次的と考えられる(従って、固有分類群の多くが、亜種や変種・品種などに置かれる)。

以上は、いわば「教科書的」な見解。問題は、そこから先。改めて屋久島の固有植物たちの由来を探っていくと、むしろ低地帯に、奄美など中琉球と同レベルの、より古い地質時代に成立し、現在まで生き永らえている種が存在していることが分かる。ま

た高地帯に於いても、単に隔離され環境に適応し特化した、とする教科書的な解釈では説明し切れない、複雑に絡み合った要素から成り立っている場合が多い。

固有という概念は、他との関連性に於いて成り立つものであり、ただ相違点に着目するだけではなく、他とどのような関係性を有したうえでの固有なのか、俯瞰的に探っていかなければならない。以下、屋久島の固有植物・重要植物について、いくつかの例を示しておく。

他に関連種が見当たらない、という意味で、圧倒的に“固有度”が高いのが、ヤクシマリンドウである。一応、同じグループの種が、中国西南部の高地帯と熱帯アジアの高山に分布することになっていて、前者に関しては著者自身いくつかの種を仔細に調べ、本書にもかなりの頁を割いてその結果を紹介した。しかしそれらの種が本当にヤクシマリンドウと系統的な繋がりがあるかどうかについては、疑問が持たれる。それとは別に、文献上は台湾(最高峰の玉山)にも分布することになっている。詳細は略す(本文を参照頂きたい)が、99%、誤報である。ただし残り1%、ガセネタとは言い切れない部分も残る。というのは、屋久島と台湾には、共通の固有(近縁)植物がいくつか存在しているからである。その代表例がヒメキクタビラコ。屋久島の高地帯に稀産し、台湾の高地帯に(ほぼ同一種と見做してもよい)姉妹種が分布する。同属種は中国西南部や熱帯アジアの山地に分布し、ただし屋久島・台湾の2種とは、それほど近縁ではないと考えられることも、ヤクシマリンドウの場合と共通する。

ヤクシマリンドウに匹敵する屋久島を代表する植物がシャクナンガンピ。同じく屋久島の高山帯にのみ成育し、近縁種(ただし外観的にはかなり異なる)は、唯一九州中部の大崩山塊に稀産するツチビノキが知られるのみ(2種で1属を形成するとする見解も)。

以上の2種は山頂部の一角だけに稀産する究極の固有植物だが、低地帯に、しかもごく普遍的に見られる植物の中にも、その由来が特定できない興味深い固有種が少なからず存在する(カンツワブキ、ホソバハグマ etc.)。中でも特筆に値するのが、低地帯の優占樹種の代表でもあるヤクシマオナガカエデ。姉妹種が本州中部(ホソエカエデ)と台湾(タイワンオナガカエデ)に分布。本州や台湾では山地帯(夏緑樹林帯)に見られるのに対し、屋久島では低地の照葉樹林帯に生育する。謎である。著者は、日本の“中間温帯林(その人為的再編が里山の雑木林)”の原型と見做している。さらに興味深いのは、このトリオの姉妹群に相当する種が、本州と台湾の山地に重なって分布、やはり中間地帯に第3の種(シマウリカエデ)が現れるが、そこは屋久島ではなく奄美大島なのである。

屋久と奄美は、同じく固有植物の宝庫といっても、次元が全く異なる、と先に述べた。ただしそれは“現在”という時間軸から見た場合に於いてである。生物地理学的区分は、時代ごとに区切りをつけて、都合よく説明されているが、何百万年、何千万

年という時間軸の中では、どこか別の時代に於ける(定説とは異なる)別の組み合わせが、間違いなく存在していたはずである。日本列島を代表する植物の一つであるチャルメルソウ属のうち、最も祖先的形質を保つと考えられる種が、屋久(コチャルメルソウ)と奄美(アマミチャルメルソウ)に残存している事実は、そのことを示唆している。

屋久と奄美の共通固有分布種は、他にもヒメカカラ(アマミヒメカカラ)やヤクシマツチトリモチ(ユワンツチトリモチ)など幾つかの組み合わせが知られていて、両地域が意外に深い関連を持つ可能性を示唆している。古い時代に他の地域から隔離された中琉球(奄美大島・沖縄本島)は、一般常識では南琉球(八重山など)との繋がりが漠然と想定されているようだが、俯瞰的、地史的に見れば、南ではなく、むしろ北(もしくは西＝中国大陸)との関連が強いように思われる。ちなみに、ここで取り上げたウリカエデ類やチャルメルソウ属は、東アジア、なかんずく日本列島を代表する植物であるが、それらの姉妹群が北米大陸の東岸(アパラチア山脈)に飛び離れて出現する、ということも興味深い。

「北琉球」は、屋久島を含めた周辺諸島の総称である。中でも、屋久島から東西僅か十数kmの至近距離に位置する種子島と口永良部島は、それぞれ屋久島とは著しく異なった植物相を有している。著者は、屋久島から50km余に位置する黒島(三島村)や口之島(トカラ列島)を加えた5つの島々の植物分布の組み合わせを常に念頭に置きつつ、屋久島の植物相に対しての。その俯瞰から、時間、空間、生命の様々な相関が浮かび上がってくる。

本書のコンセプト「北琉球としての屋久島」を象徴する対象が、ヤクシマコンテリギ(トカラアジサイ)とアズキヒメリンドウ(ヘツカリンドウ)である。屋久島は、日本(狭義の日本列島)の南端であると同時に、南西諸島・琉球弧の北端でもある。屋久島の「位置づけ」を考えるにあたっては、これまでは、ひたすら前者の視点からのアプローチがなされてきた。著者は今、後者の視点からのアプローチの必要性を切実に考えている。南西諸島・琉球弧は、時間軸を遡る過程で、重層的な側面を垣間見せる。それを現在の空間に表しているのが、トカラアジサイやヘツカリンドウの分布パターンである。

著者が本書で重点的に取り上げた植物の一つが、ヤクシマキイチゴ～リュウキュウイチゴ複合種。

ヤクシマキイチゴ単独で見れば固有種。モミジイチゴ(の変種)と考えれば分布南限。リュウキュウイチゴに包括すれば分布北限。両者の複合種と見做せば分布の中心。種群ピロードイチゴの一員とするならば、東アジア広域分布種……。どれが正しいという問題ではないような気がする。固有種、北限種、南限種、広域分布種、帰化種……。安易なカテゴライズはしたくない。堀田満博士の提唱する、「固有的植物」「雑草的植物」といった、一見曖昧に思える表現を、積極的に取り入れたい。

学問を、カテゴライズすることに意義を見出すものとするならば、本書は学問(学術書)ではない。曖昧な対象は、敢えて曖昧なまま示した。読者には、本書から「学ぶ」「調べる」ことは望んでいない。「知る」「追究する」ことに対しては、大いに手助けをしたい。

屋久島から記録の有る全ての種について言及し、出来得る範囲で国外産を含む近縁種を併記紹介した。

それぞれの科の項目の末尾に、科(キク科については連)の全体像を、ごく簡単に記述し、屋久島に分布を欠く代表的な種や、馴染みの園芸種などの写真紹介を行った。

一般の人々が屋久島に於いて目にする植物の大多数は園芸種(あるいはそれに基づく逸出帰化種)。それらの大多数は、生物地理的視点から見た屋久島の植生とは縁も所縁もないことは言うまでもないが、実際に目にする機会が多くなれば、全く無視するわけにもいかぬであろう。科の概要で、いくらかでも補うことが出来れば幸いである。

いずれにせよ、本書の構成上の統一は、敢えて為されていない。その時々著者(青山)の思惑に沿って、臨機応変に組んでいった。

例えば和名。複数の名が提唱されている場合は著者の判断で選択したが、特に根拠はない。目録(Yリスト\*に従う)で使用した名と異なる場合は、()内に目録での名を示し、二重下線を付した。

学名に関しては、原則目録で使用した名に従った。多くの分類群は分子生物学的解析手法に基づく系統関係の構築が終結しておらず、種の位置づけが流動的であるが、現時点での最適と思われる名を選んだ。ただし一部の種については著者の判断で独自の見解を採った。学名・和名とも最終決定ではなく、今後の選択に於ける起点と為すものをご理解頂きたい。

本体 4 巻とは別に、補遺として目録を作成した。「鹿児島県の維管束植物分布図集・全県版(2022)」に基づき、(帰化種や逸出種を含む)屋久島から記録されている全ての種をリストアップしたが、一部誤認報告や明らかなシノニムと見做されるものについては、田金秀一郎氏の判断で、目録から割愛した。

目録に於ける学名・和名の選択に関しては全面的に田金氏の意見に従い、そのうえで本巻との異同がある場合は、本巻に於いて異同選択の理由を説明した。

目録+本体 4 巻をセットとして示すことで、学術書、著者の自由な見解に基づく「作品」、両面での対応を為すことが出来たのではないかと考えている。

並び順は、APG 分類(原則第Ⅲ版、一部第Ⅳ版を選択)に従い、目および科の順に紹介していった。目録では、(シダ植物を末尾に回し)裸子植物→基幹被子植物(単子葉植物を含む)→被子植物バラ科植物群→同・キク科植物群の順番で並べたが、

本巻では逆に、キク科植物群を冒頭に置いて、基幹植物へ遡る並べ方を採択した。構成上の都合で、多少の変動もある。

著者および田金氏(一部その他の協力者)撮影の生態写真を基盤に構築したが、欠落写真は、概ね「鹿児島大学総合研究博物館所蔵屋久島産標本」「屋久島以外で撮影された生態写真」に拠った。

他地域産の関連種を積極的に取り上げた。同一種内の下位分類群、姉妹種のみでなく、ある程度の近縁関係を示す種も対象としたが、頁組の関係もあって臨機応変になされたため、基準はない。

中国大陸産も、少なからず取り上げた。著者の所持写真の大多数が、中国産であることに拠る。しかし現実問題として(著者の力量では)詳しい比較検討は困難であり、対象とした種(未同定のものを多く含む)が必ずしも屋久島産に対応する姉妹種・近縁種とは限らない。何らかの参考になれば、十分であると思っている。

ヤクシマコンテリギ(トカラアジサイ)、アズキヒメリンドウ(ヘツカリンドウ)、ヤクシマリンドウ、ヤクシマオナガカエデ、リュウキュウイチゴーヤクシマキイチゴなど、著者が特に拘りをもつ対象については、オリジナル報文の再掲を含む(しばしば記述内容が重複)やや過剰とも思える記述を行った。その旨、ご理解を頂ければ幸いである。

本書は、実質田金氏との共著であり、氏の尽力なくしては成しえなかつただろう。本来なら「監修」とさせていただきたかったところであるが、(ことに本巻においては)青山の意見の独自性を前面に出したことから、ご迷惑をおかけしない、という前提に立って、「協力」という形にさせていただいた。

本書の上梓は、ゴールではなく、スタートであると考えている。本書は「図鑑」ではなく、問題提起を主眼とした「作品」である。本書で為した示唆が、今後の屋久島産植物の様々な角度からの探求の基盤となることを願っている。